


 ずいそう

地雷被災地へのスタディ・ツアー


 篠田 昭二

皆さんも「スタディ・ツアー」という言葉を耳にされた事があると思います。

一般的にはNPOなどの団体が周囲の支援者などに対して自分たちの活動を実際の現場で見学、体験してもらうために企画するツアーなどを指しています。

私自身がこのスタディ・ツアーを初体験したのは今から1年半ほど前である。

その半年ほど前から「豊かな大地」というNPOに関わり始めておりちょうど内部で会員を対象としたツアーの準備が進み始めたところであったので、それがどんな内容で纏まるのか、また実際にツアーに参加した会員がどのような印象を持つのだろうかと興味があり、主催者側としてではなく、一会員の立場で参加してみた。

このNPOは対人地雷除去機の開発を進めている日立建機グループの社会貢献活動の一環で設立され、地雷が撤去された後の土地に住む住民の生活自立支援活動を現在はカンボジアに焦点を当てて活動しており、同社、関係企業などの法人会員と従業員やその家族、あるいは社外の一般の方々などの個人会員で構成されている。

今回のツアー参加者は、現役従業員、OB（私もこの1人）、家族、一般の方など合計10名の会員とNPO事務局スタッフ1名で、平成20年12月6日から13日までの8日間で団体の活動地であるバタンバン州スラップン村での活動状況の見学、体験参加などを目的として、合わせてカンボジア地雷活動センター（CMAC）による実際の地雷撤去状況の見学や首都プノンペンや世界遺産アンコールワット観光などを織り込んだものであった。

参加者や私が感じた印象などを中心にツアーを思い出してみると…プノンペンから州都バタンバンに到着後最終地シムリアップまでは全て4輪駆動車5台に分乗での移動で、この間の道路は舗装が全くなく車内では絶えずドアの取っ手を握っていなければいけないような路面状態と乾期特有の濛々たる砂ぼこりの連続で、私は50年以上前の日本の地方道路でもこんな状態ではなかったなあと考えながら必死に掴まっていた。

すでに団体のスラップン村での支援活動は2年目に入っており、そこで小学校や井戸の建設だけではなく農業や毎日の生活に直接結びつく村道の手直しや農業指導にも力を入れており、稲作のやり方の改善、きの

こ栽培や蛙の養殖などを地元のNGOと連携して行っており、これらの状況を2日間にかけて見学し、一部を住民と一緒に体験した。勿論言葉は殆ど通じないが参加者が前日見よう見真似で書いたクメール語の自分の名札をぶら下げながら何とかボディランゲージでのコミュニケーションをする中で住民の素朴な笑顔に触れて普段とは違った笑顔をしている自分たちを見出し

ていた。稲作方法の改善指導は全体としては成果を上げているが住民それぞれの事情や考え方でかなりのバラツキがあり推進派と面倒くさがり屋などに分かれているようで、今後もじっくりとフォローアップを続けていく必要があるのだろうと感じた。その一方できのこ栽培は収穫までの期間が短くあまり手間も掛からないので奥さん達を中心に歓迎されており、手応えを感じた。

CMACによる実際の地雷撤去活動の状況も見学できた。地雷があると推定される場所に生えている灌木の伐採に始まり、熱帯気候下で完全防弾装備での単純だが非常にきつい地雷検知の繰り返し作業、更には発見された地雷の爆破処理などの見学で、日本や通常のツアーでは絶対にできない経験をした。

丸2日間の体験見学会を終えてまた4輪駆動に分乗して最終目的地アンコールワット観光の宿泊地シムリアップに6時間くらいかけて到着したが、市内に入った途端に別世界に来た印象を受けた。多くの国際級のホテル、舗装状態の良い道路…、日本に帰れば、あるいは周囲の東南アジアの国でも当たり前前の景色だが、移動も含め足かけ4日間“文明から隔離された”世界で過ごしてきた参加者はそのあまりにも大きなギャップを目の当たりにして暫く呆然となった。多数の元難民と地雷被災という内乱の後遺症を見てきた直後の何とも言えない矛盾の入り混じったショックをそれぞれが感じたのであろう。

そのような複雑な印象を持ちつつも、その晩は久しぶりに“文明社会の”美味しい夕食を、翌日はアンコールワット観光を十分楽しんで8日間の手作りスタディ・ツアーは無事終了したが、こうした貴重な経験を共にした参加者同士がその後も同窓会のように連絡を取り合っていると耳にしており、団体の強いサポーターになってくれているのは大変有り難い事である。